
プレグナッ！！

桜木焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プレグナツ！！

【Nコード】

N9014Y

【作者名】

桜木焰

【あらすじ】

地球が異星人に侵略され、人類は宇宙に逃げるか、隠れて住むしかできなくなつた。地下で異星人に対抗する反エイリアン機士団『レジスタンス』に務める技術士の息子、桜田一輝は対エイリアン用のユニット『プレグナ』に乗って戦うことになった。人類が初めて作つた対エイリアン用のユニット『プレグナ』は異星人に勝つことができるのか。

第1話（前書き）

小説の練習のつもりで書いてみました。拙い文章かもしれませんが、温かい目でみてください。

第1話

地球が異星人に侵略されてどれくらいの月日が流れただろうか。

地球人の多くは、月や火星に渡り、平和な日々を暮しているんだろう。

しかし、事情により、地球に残らなければいけない人だっている。

移民するにはお金がかかる。

その費用は、一般市民でぎりぎり届くぐらいだ。

払えない人たちは、みな、隠れて住んでいる。

人目に付かない場所でいつ見つかるかもわからないような暮らしをしているそうだ。

でも、地球に残っている人たちみんなが、お金がないわけじゃなかった。

地球に残って異星人と戦おうとする集団ひとたちだっている。

その、反異星人機士団アンノウン『レジスタンス』も、その意思を持つ集団のひとつだ。

『レジスタンス』は現在、地下『アンダーグラウンド』に本拠地を持つ。

このオレ、桜田サクラダ 一輝イツキも父と共にこの地下に住んでいる。

父親である桜田 優作ユウサクは『レジスタンス』で技術士をやっている。

つつても、アンノウンに対抗する兵器を日夜研究し続けているため、ほとんど家には帰ってこない。

それに、会ってもケンカするだけだしな。

そんなことより、今はここ『アンダーグラウンド』ではゲーセンでロボット物のアクションゲームが流行っている。

そのゲームではオレ、なんとランキング1位だったりするのだ!!

このゲームをやっているヤツで、「閃光のイツキ」というプレイヤーネームを知らないやつなんて初心者以外にいない。

まあ、その「閃光のイツキ」がこのオレだということは他のやつは知らないんだが……

「よお、閃光のイツキ」

バシてる!?

つて、この聞いただけで腹が立つような声は……

「クソ親父かよ。いい年こいて暇つぶしにゲーセンか? 暇なら、ここにくるより、研究所に戻って大好きな機械でもいじくってるよ」

「ハッハッハ、ずいぶんと嫌われたもんだ!!」

「うるせえ、邪魔だつってんだよ!!」

「おっ？ いつ、お前が邪魔だつて言ったんだ？ 何時何分何秒？
地球が何回、異星人に征服されたとき？」

くだらねえジョーク言ってるじゃねえよ。

ろくに家にも帰らない奴が、なれなれしくしないでほしい。

「……なんか用かよ」

用がなければ、わざわざオレの所に会いに来たりはしない。「寂しくて会いに来ちゃったー!!」なんて言ったら、ぜってーぶつ潰すと、言っても、オレはゲーム中なので画面から目を離したりはしないが。

「さすが我が息子よ!! 俺のことをよくわかっているな!!」

親父のことは一言で説明ができる。『めんどくさい人』だ。

「……実は、折り入って頼みたいことがある。我が息子に、ではなく、『閃光のイツキ』に、な」

「は？」

急に声のトーンが低くなったので、何事かと思うと、その表情はいつもの親父ではなく、初めてみる、人が笑わない、真面目な表情だった。

それに、息子にではなく、「閃光のイツキ」にだと？

しかし、オレはその意味を理解する前に、真面目な親父の顔に気圧されて、「ついてこい」と言う言葉に黙って従うことしかできなかった。

黙ってついてきたその先は、暗い部屋だった。暗くて、とても冷たく、まるで死後の世界のように思えた。

「なんだよ、ココ」

「世間一般で言う、格納庫ってヤツだな」

正直、親父の言う世間ってヤツが、今はどこにあるのか聞いてみたい気もしたが、それは親父の言うくだらないジョークと同類な気がしたので、それは聞かないことにした。

「もしかして、アンノウンに対抗する兵器かなんかが出来たのか！？」

「まあ、どちらかといえば出来た……かな？」

「かな、って」

元の親父に戻ってやがる。さっきまでの真面目な顔はどこに行った

んだろうか。

「それで？ この格納庫に連れてきて何の用なんだよ。まさか、その新兵器を息子に自慢するために連れてきたとかいうんじゃないだろうな」

「言っただろ、息子に、じゃなく『閃光のイツキ』に用事があるって」

しかし、親父はそこから先をなかなか話そうとしない。あーっ、イライラするな！！

「なんなんだよ！！ 用があるんなら早くしてくれよ！！」

親父は黙って目を閉じていた。数秒間そうしたあと、静かに目を開けてオレの目をまっすぐ見つめて語り始めた。

「……もうすぐ、ここ、『アンダーグラウンド』に5体のアンノウンが侵入してくる」

「なっ、なにっ！？ それって、やべえんじゃねえのか！？」

親父の唐突な発言により、オレは驚く以外のことができなかった。

それでも、親父は話を続ける。

「だが、我々『レジスタンス』には奴らに対抗するための手段を生み出した」

「手段……？ それって……」

「俺が開発した、対アンノウン用二足歩行型ユニット『プレグナ』だ！！」

親父が言い終わると同時に、証明が光を指し始め、格納庫を一望できる。

格納庫は学校の体育館の何十倍もの広さだった。

すげーでかいなっ！！

その広さには驚いたが、しかし、肝心の兵器？ とやらが、見当たらなかった。

「おい親父、その親父の言うユニット？はどこにあるんだ？」

「ほら、あそこにあるだろう」

親父が指さす先に、そのユニット「プレグナ」があった。

あつたが……

「あれは……遠いな、置いてある場所が」

「格納庫の広さの割に、ユニットが思ったよりも小さくてな」

いや、まあ、別にいいんだけどさ。

親父と二人で歩いて、そのユニット「プレグナ」の近くまで来たが、思ったよりもでかいな。

10メートル以上はあるか？

「お前にこれを動かしてもらいたい」

「はあ！？ オレが！？」

親父の言う頼みって、コイツを動かさせてことだったのか。

一応、オレも男なので、こういつたロボットみたいなやつを生で動かすというのには、やっぱり、憧れがあるみたいで。

ただ、動かすだけなら別にいいんだが、しかし……

「お前にこいつを動かして、ヤツらを、アンノウンを倒してほしいんだ」

本当にそんなことを言っているのか？ 「冗談、じゃないのか？

「オレが……アンノウンを倒せだって！？ ふざけんな！！ もうすぐ来るってヤツら相手に、練習なしに戦えっていうのかよ！？」

「お前は、あのゲームでランキング1位をとっているらしいな」

「ゲームと現実の違いは違うだろ！？ 動かし方とか戦い方とか、いろいろ違うことだらけだろうが！！」

オレは力一杯の音量で親父に反抗する。昔からいつもそうだ。この人は理解不能なコトばかりを言い、いつも、オレを苦しめる。

「わかっている。だが、お前しかないんだ」

「こいつを動かせるヤツぐらい、組織が用意してるだろうが!!
シミュレーターとかやらせたりして……まさか」

1年前、急にアーケードゲームが異常なぐらいはやり始めた。

もしかして、あれは組織が作った、パイロットを選び出すためのものなんじゃ。

「気づいたようだな。そうだ、あのゲームはこの『プレグナ』に乗るパイロットを選び出すための物。そして、ランキング1位であるお前に乗ってもらいたいんだ」

バカにしている……。こいつは、いや、この組織は、人を馬鹿にしすぎている……!!

「ふざけるなあ!! 子供に兵器を使わせるつもりなのかよ!!
オレや、オレと同じ年の子供に戦争をやらせよって言うのかよ
!!」

「子供……?」

「なんだよつ!! オレはまだ15だぞ!! 威張っていうようなことじゃないが、まだ15だ!! そんな年のやつに武器持たせて戦えって言うてんのかよおお!!」

「黙らんかつ!!」

親父の一喝は格納庫中に響いた。こんなに声を出した親父は初めて

見た。いや、聞いた。

「子供が武器を持って戦うことのなにがいけないんだっ!!」

「なっ、お前、それでも大人がいうことが……?」

「大人は戦い、子供は好き勝手していればいいというのかっ!!
じゃあ、戦う大人がいなくなったらお前たち子供はどうするんだ!
!」

「そんなの、詭弁だろうが!!」

「だれかが、やらないといけないんだ!! それが、たとえ子供で
あるうとも私は容赦なく戦場へ送る!! それが、戦争だ!!」

「戦争は終わっただろうが!! アンノウンの勝利ってというのは、
いけ好かないが、その終わった戦争をまたしようってというのは、全
部大人たちの都合だろうが!!」

「じゃあ、ここは落ちてもいいんだな」

「なにっ?」

「ここ、『アンダーグラウンド』は宿敵、アンノウン異星人に攻撃され破壊さ
れてもいいんだな」

「くっ」

ここは、オレたちの住む場所だ。

オレたちの住む場所を守るにはこのユニット『プレグナ』で戦う以外に方法はない。

そして、

『大変です、サクラギさん!! 敵、アンノウンが予定よりも早くこちらに接近しています!! プレグナを至急発信させてください!!』

アナウンスで男の人の声が、急を告げる。

「どうする? もう、他のパイロットを探している暇は無い。お前が乗るか、ココが潰れるかの……どちらかだ」

「親父、生きて帰ってきたら必ずぶん殴らせる!!」

オレはユニットの上にかぶさっていたシートをどかす。

今日からこいつがオレの相棒になるわけだ。

よろしくな、『プレグナ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9014y/>

プレグナッ！！

2011年11月27日01時12分発行